

子どもと家族と学校と

⑤

『姉 13 歳と弟 3 歳のきょうだい』

CON カウンセリングオフィス中島

中島 弘美



ひきつけられる情報

さまざまな家族に出会って面接をしていると、なんとなく気にかかる話題や珍しいなあとひきつけられる情報があったりする。

たとえば、年齢差もそのひとつだ。

年齢の離れている親子、夫婦、きょうだいなど、年齢差に注目することで、家族のことをより理解できることがある。

そのことばかりに注目するわけではないが、ジェノグラムを作成してみると、この家族は日々どんなドラマがあるのかなど、いろいろ想像して面接をする。

時には、そのひきつけられた情報が、面接回数を重ねていく中で、大きな意味を持つことがある。



父、母、姉、弟

ユリエは私立中学の一年生。長期欠席状態になり、家族カウンセリングにやってきた。

父は自営業。母はパートタイムで働いていた。

母・父・ユリエの順番で椅子に腰かける。母と娘は、父を挟んで、離れて座り、セラピストは家族の正面に座っている

ユリエは入室してからずっと不機嫌だ。喜んでカウンセリング来る子どもはいないが、それにしても目つきは鋭く、荒々しいしぐさが気になった。

それぞれのあいさつのあとで、

「もうひとり弟がいますので、四大家族です」

と、母が説明した。

もう一人の家族、弟は 3 歳。ユリエが 13 歳なので、10 歳離れていることになる。保育所に行っている弟は、面接当日は、祖母に預けて、カウンセリングには三人でやってきた。

母と離れて座っているユリエは、高い鼻がお母さんにそっくり、だれがみてもすぐに親子だとわかった。

セラピストが話しかけるとすんなり応えるが、母がセラピストにユリエの家での様子を話しているとき、その発言内容によっては、何度か母をにらんでいることがあった。

家族の話をまとめると、これまでのユリエの事情はこんな感じだ。

受験をして、希望の私立中学に入学した

ものの、長期欠席になった。特に目立った理由があったわけではない。最近、外に出かけることもなくずっと家にいると、イライラがたまるようで、学校をやめると大声で叫び、弟にあたりちらして、蹴ることもある。

母は、不登校のユリエのことだけでなく、弟への影響も心配していた。



初孫だったユリエ

ユリエは、両親が働いていることもあって、近くに住む祖父母から大切にされてきたが、弟が生まれてからは、みなに関心は、ごく自然に弟にうつっていった。『ケンちゃん』とケンタのことをみんなが呼び、愛想の良いケンタは、可愛がられていた。

そのころから、「弟ばかり」とユリエは言うようになっていった。初孫だったユリエにとって弟ができてみんながちやほやする、だからこの子は、問題を抱えてしまった、これが原因でしょうか、と母が深刻に話す。

たしかに、十三歳と三歳は年齢の差があるので、弟のケンタが生まれてからの生活は、家族にとって大きな変化もたらし、まだそのさなかにあるのかもしれない。両親も小さな子どもと思春期の子どもを同時に育てる中で、苦労も多かっただろう。これが全ての原因だと思えないが、ライフステージの変化による影響はこの家族の課題の一つと考えられる。

ユリエは、口をとがらして話す。

「弟が生まれてからは、ケンタのことばかりみんなきいて、ケンタには優しい声で話しかけるのに、私には、お姉ちゃんだから我慢しなさいってお母さんはいう。不公平！」

母は、

「ユリエは、初孫だったからみんながうれしくて、甘やかして育てたので、ケンタが生まれて、お姉ちゃんになったのだから、これからは、しっかりさせなくてはと思っていました。なので、多くの用事をいつけていたのかもしれませんが」

年齢が離れて弟や妹が誕生すると、きょうだいの反応はまちまちで、極端に世話を焼きたがり、母きどりの場合もあれば、まったくかかわりたくない場合もある、ユリエは、ケンタにたいしてお姉さんのようなかかわりはあまりしなかったようだ。

一方、ケンタは姉にあまりなついていなかった。お姉ちゃんのことを怖がり、その様子がかえってユリエを刺激し、ケンタに「この子は可愛くない！」とあたっていた。

不登校状態になったユリエの家族は、これまでのことをふりかえり、何が良くなかったのか、何が問題なのかを家族なりに話している。なんとかしたいと取り組んでいる姿勢がとても伝わってきた。そんな中で、父の考えはこうだ。

両親とも忙しくしている時に限って、ユリエの機嫌が悪いようだという。季節によっては、父は夜中まで仕事におわれることもあり、そんな時に母は、弟が病気で熱を出したりするとかかりつきりになっていた。どうしても弟中心の生活になっていった。

不器用なところの多いユリエは、ものを出しっぱなしにしたり、壊したりして、母によく叱られた。だまって祖母の家に出かけるというか逃げ込むことが多かった。祖母は、ユリエの気持ちを受け入れていて、よく話をきき、彼女をささえていた。

「おばあちゃんのところに行って、家での不満をしゃべっているようです」

どうも母はそれも気に食わないようだった。

家族のそれぞれが精いっぱいのことをやっているのが、理解できたし、それぞれの不満もわかってきた。



「ユリエの家出？」

父からオフィスに電話が入る。

「娘がいなくなりました、もしかしてそちらに連絡はありませんでしたか？」

父があわてている。

「おばあちゃんのところにも行ってないのですか」

と聞き返すが行方がわからない。

「もしも連絡がありましたら、ご自宅に電話いれますね」

父はあちこち探し回っていた。

母は、心配しているというよりも、どうしてこの子はこんなに人に迷惑をかけるのか、わがままなのかと、腹だたいい思いでいっぱいになっていた。

その日、夜遅くになって、父から連絡があった。近くのお店にいるところを父が探し出した。ユリエはコンビニや近所

のスーパー、駅前のショッピングモールで過ごしていたことがわかった。



怒鳴らないで、話し合いをする

父は、捜している最中に、もしも見つかったときには、怒鳴ることはしないで、ユリエの話をきこうと母に、提案していた。

無事に見つかって、家にもどってきたけれど、母は、気持ちがおさまらず、「なんで人に迷惑ばかりかけるのか」ときつく、ユリエに接した。

ユリエは母をにらみつけている。

一方的に話し続ける母は、なかなか落ち着けない。いかに心配していたかをユリエに話すか、話せば話すほどヒートアップしていった。

父が、会話に入り、三人で話をしようと語りかけた。



10歳までひとりっ子

ユリエがいうには、自分だけ叱られて、ケンタは甘やかされ、母親がだんだんきつくなっていると思っていた。

確かにユリエは、同級生と比べても、かたづけはできないし、いつもプリントをなくして、常にさがしものをしている状態だった。しっかりしているとは感じられず、無駄なく行動する母からみると

だらしなさが許せなかった。そのために何かと叱られていた。

「お姉さんでしょとかいわれても、なりたくてお姉さんになったんじゃない！無理！ひとりっ子が長かったのやから、仕方がないってお祖母ちゃんが言った！」

その時、母は

「一人っ子だったと改めて思い出しました。良く考えると、十歳までひとりっ子だったのですね。ハッとしました。」

そのときの様子を神妙に話す。

ユリエをお姉さんらしく、しっかりさせることばかり考えていたけれど、全然それはユリエには伝わらず、かえって苦手意識を感じさせていたのかもしれない。



ひとりっ子を二人育てる

父は、母の態度に対して、

「やっぱり、上には厳しくして、下には甘いよだから、ユリエのいうこと、僕はわかるよ、相当怒っていると思う」

ユリエとケンタ、一人っ子を二回育てていると思うと、良いのかもしれない、少し異なった見方でユリエに接してみようと母が気付いた。

母と娘はいつもお互いを責めていたが、本当は、お母さんといっしょにおしゃべりするのが一番楽しいというユリエ。似たもの同士だからこそぶつかり合うのかもしれない。いがみあっているようだが、カウンセリングの帰り道に前回は、ドーナツ屋に行った。

いつも弟が一緒だと、好きな場所に行けないからちょっとうれしかったという。

ユリエの気持ちが少しずつほぐれてきている。



学校よりもまずは塾？

学校についての話をしていくと、新学期にもう一度登校することができるようにと両親は考えていた。が、ユリエは、再登校について具体的に考えられる余裕はまだなかった。ただ、勉強が必要であることはよくわかっていた。

父から、小学生のときに通っていた塾の先生に勉強を見てもらおうという話になる。するとあまりユリエは嫌な顔はしなかった。

変化の兆しが見えてきた。塾に通う話が進みそうだ。

ユリエの通う学校は、熱心な進学校のため、いろいろと息がつまることがあるかもしれないが、それよりも、家族内の息苦しさを和らげることがポイントのようだ。

幸い、在籍している中学は、長期欠席になったとしても、退学勧告などはなく、本人の意思を十分尊重してくれることがわかり、両親の焦りは減っていった。

一人っ子を二人育てる方式で、しばらく両親は、やってみることにした。